

出土した遺物

堅穴建物やその周辺の流路からは、土器をはじめ、金床石や砥石・ファイゴの羽口・鉄滓、微細な鉄片（鍛造剥片）といった、鍛冶が行われていたことを示す遺物が出土しています。また、古墳時代中期前半の遺構からは、韓式土器など特徴的な遺物も出土しています。



古墳時代前期の土器

堅穴建物からは日常使用される土器も出土しており、住居兼工房であったことがわかります。中期の堅穴建物についても同様で、住居と工房は未分化のままです。



韓式土器鍋（古墳時代中期）

日本列島在来の土器とは異なる技法で土器表面が調整された、朝鮮半島系の土器です。韓式土器の出土は、今回見つかった工房群に、渡来人が何らかのかたちで関与していたことを示しています。

発掘調査でわかったこと

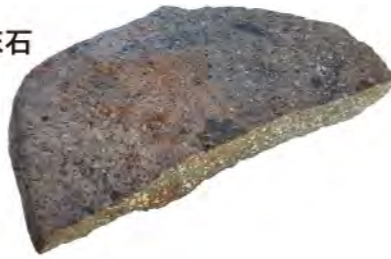
- ①南調査地で見つかった古墳時代前期の堅穴建物13棟からは、鍛冶に使用されたとみられる、通常よりも強く被熱した炉が確認されましたが、鍛冶作業に伴う遺物が乏しいことから、金属探知機を用いて金属反応の探査をしました。その結果、建物内部全体で反応がみられ、鍛冶工房であることが判明しました。
- ②北調査地では古墳時代中期の堅穴建物が12棟みつき、鍛冶炉のほか、炉へ送風するための道具であるファイゴの羽口や金床石・鍛冶滓・鍛造剥片などの遺物も多く出土しています。建物の規模や構造も前期のものに比べて画一化しています。また、韓式土器も出土していることから、この頃になると渡来人の先進技術の導入による工房群が営まれていました。
- ③出庭遺跡を含む栗東市北部では、古墳時代前期より鍛冶工房をはじめとする手工業生産工房が集中して営まれていることから、組織だって運営されていたものと考えられます。県内でも有数の規模であり、技術的先進地域であったことが改めて明らかになりました。



前期の堅穴建物 21 から出土した 敲石 台石（金床石）の上で、素材の鉄を敲石を用いて鍛錬し成形していきます。

中期の流路から出土した金床石

上面には熱を受けて赤くなった部分や、ひび割れているところもみられます。鍛錬の時の台石（金床石）と考えられます。



鍛冶滓

中期の堅穴建物や流路からは、鍛冶作業の際に出る不純物である鍛冶滓が多量に出土しています。

鍛造剥片

鉄を熱したときに表面にできる酸化被膜が、鍛錬の時に飛び散ったもので、堅穴建物に堆積した土を丹念に水洗することによってみつけられました。



レトロ・レトロの展覧会 2024 特別陳列 / 出庭遺跡編

赤銅と黒鉄 - 古墳時代～平安時代の金属生産 -

令和6年(2024年)7月22日 / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をおして
ゆたかな暮らしづくりに貢献します。



遺跡と調査の概要

はじめに 栗東市北部の辻地区には、江戸時代に鑄物の製造販売により全国各地に出職、出店したことでよく知られている辻村鑄物師の本拠地がありました。これをさかのぼること千年以上前の古墳時代から平安時代にかけて、周辺地域一帯では銅や鉄製品の金属生産が行われていたことが、近年の発掘調査によりわかってきました。今回の展覧会では、古墳時代前期～中期(約1,700～1,600年前)の鉄製品の鍛冶工房が見つかった出庭遺跡と、奈良時代～平安時代前期(約1,300～1,100年前)の銅製品や鉄製品の生産遺構が見つかった高野遺跡をとりあげ、これらの金属生産にかかわる遺物や土器などを中心に紹介していきます。

遺跡の概要 栗東市北部の野洲川左岸に所在する出庭遺跡・辻遺跡・岩畑遺跡・高野遺跡は、古墳時代には県内屈指の大集落が存在していたことが知られています。また、これらの遺跡では、鉄鑄をはじめ多くの鉄製品を所有していたことがこれまでの調査でわかってきており、鍛冶を行っていた痕跡もみつかることから、古くから鉄製品を加工する技術をもった集団が居住していたことが知られています。

調査の概要 出庭遺跡の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所が計画している一般国道8号野洲栗東バイパス建設に伴い、平成30年度から令和4年度にかけて実施しました。その結果、古墳時代前期・中期の堅穴建物が40棟近く見つか、そのうちの半数近い建物において鍛冶炉を検出しました。また、鍛冶炉に伴って鉄製品や砥石・金床石といった鍛冶具、微細な鉄片が出土したことから、この一帯には鍛冶工房群が広がっていたことがわかりました。

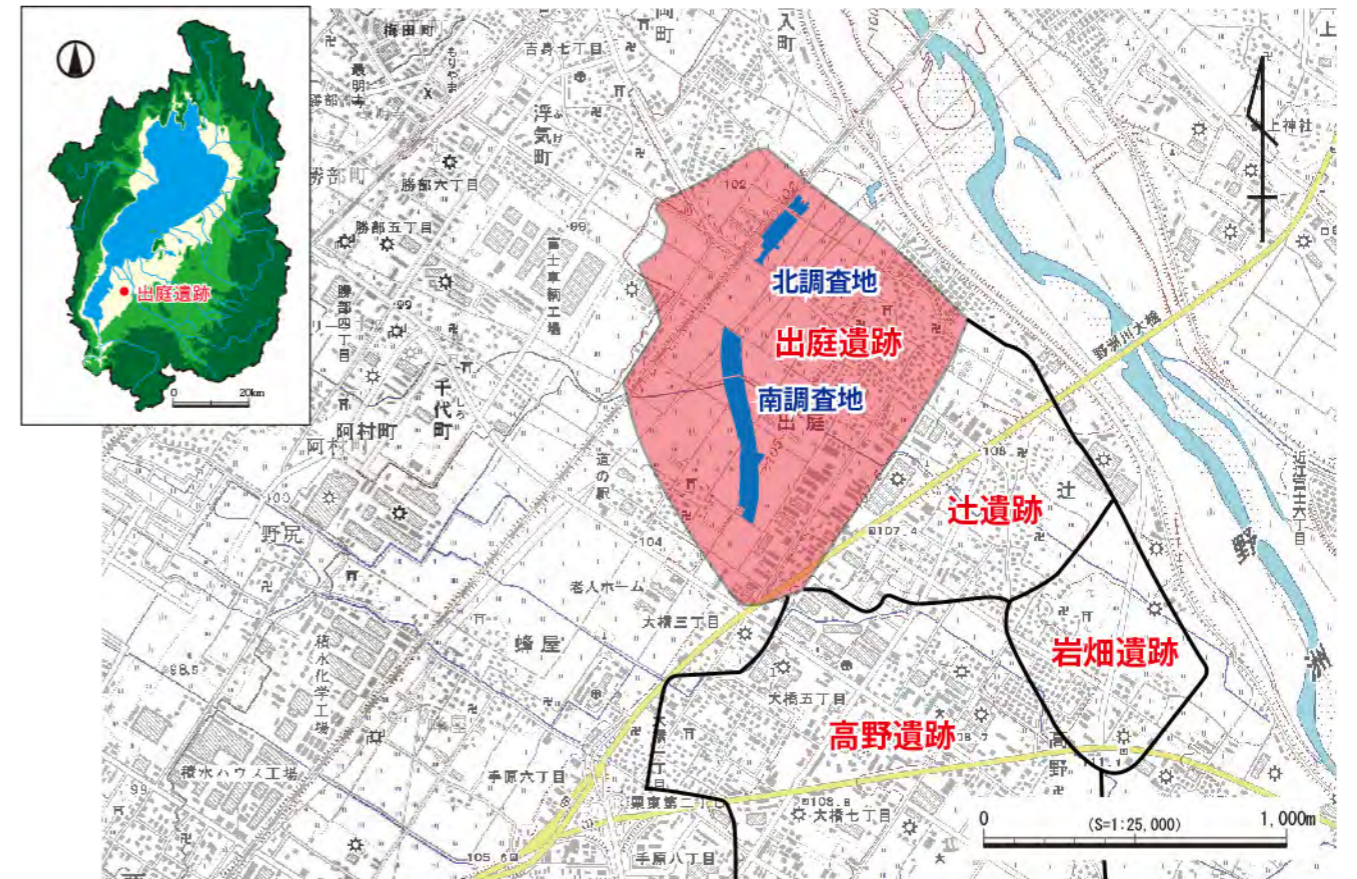
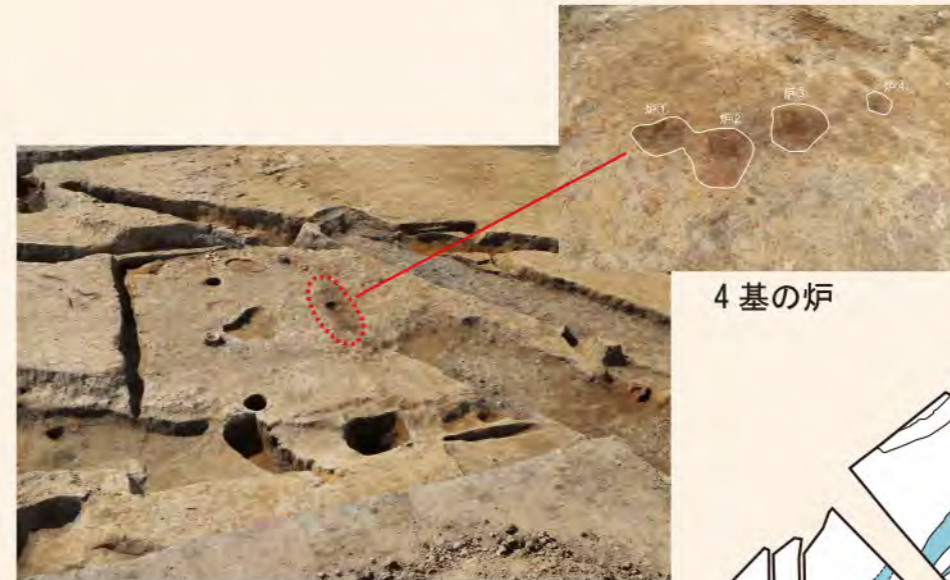
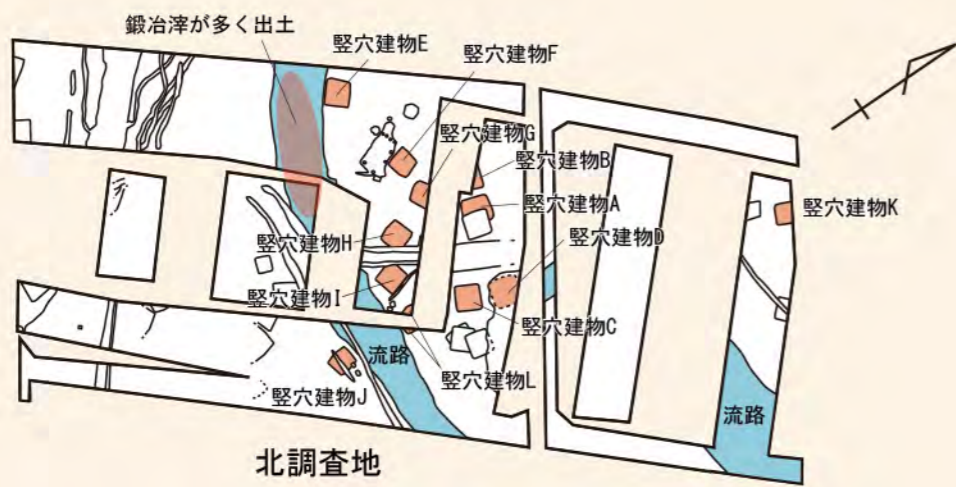
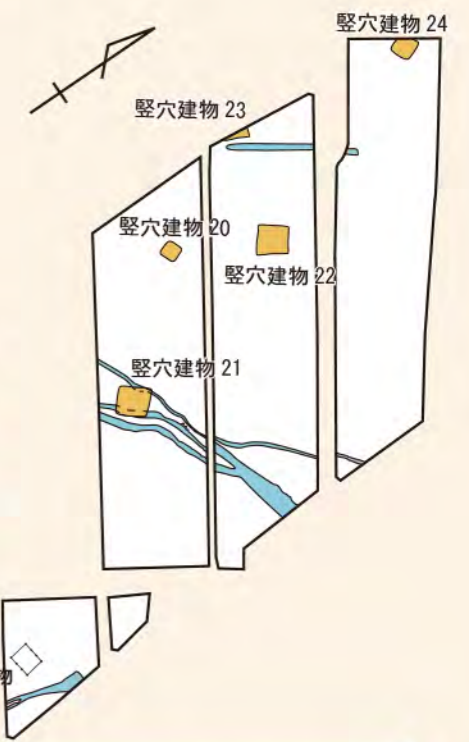


図1 出庭遺跡の範囲(赤色)と今回の調査地点(青色)



古墳時代前期の竪穴建物 21



古墳時代前期 南調査地では20棟以上の竪穴建物がみつき、そのうち13棟で鍛冶炉が確認できました。建物の面積は最大で100㎡、最小で9.24㎡と、大小様々なものが見られます。

画一的な古墳時代中期の鍛冶工房建物と比べて、前期は鍛冶の方法や工程等、試行錯誤していたことがわかります

建物からは、敲石や砥石、微細な鉄片(鍛造剥片)が出土しました。また、床面に金属反応が確認できるものもありました。



古墳時代中期の竪穴建物H

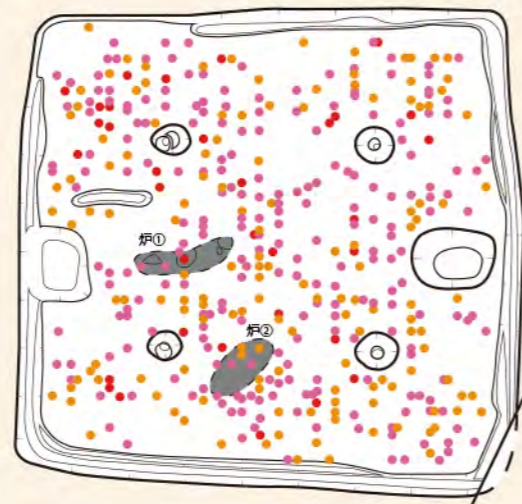
古墳時代中期 北調査地では竪穴建物は12棟みつっています。いずれも一辺が約4.5mの方形となり、床面には円形の被熱痕がみられます。

建物からは、鉄製品や送風装置の部品であるファイゴの羽口、熱を受けた扁平な石(金床石)、砥石、微細な鉄片(鍛造剥片)が出土するとともに、近接する流路からは多量の鍛冶滓が出土しました。

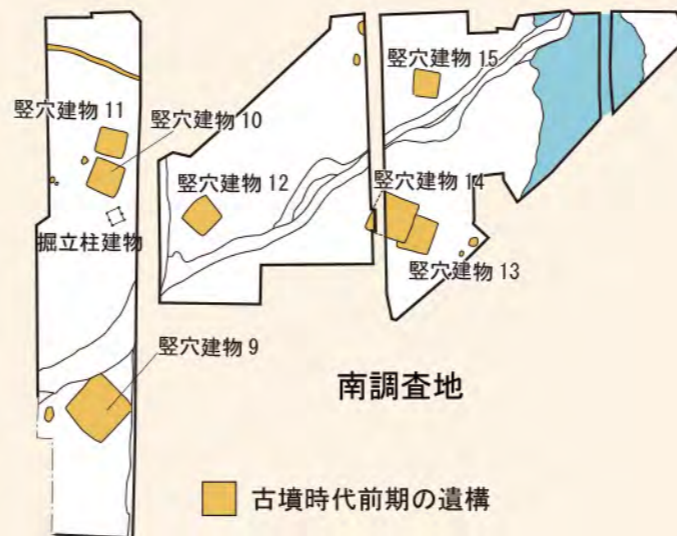


金属探知機を使って調べる

金属反応を調べる 竪穴建物の床面を金属探知機を使って探査しました。土の中にしみ込んで肉眼観察ではわからないような微細な痕跡も、その強弱を数値で表すことができます。その結果、建物の外では金属の反応がなかったのに対して、内部の床面全体には反応がありました。このことから、建物内全体に鉄片が飛び散る作業をしていたと想定されます。



竪穴建物22床面の金属反応



南調査地

■ 古墳時代前期の遺構
■ 古墳時代中期の遺構

0 50m
(1:1,500)



古墳時代前期の鍛冶の様子 (想像図)